

## 大震災からの教示

八ヶ岳森林文化の会理事長 中野昭彦

この度の東日本大震災により被災された方々に、心からお見舞い申しあげますと共に、被災地の一日も早い復興をお祈りいたします。大地震による津波で人も家も船も車も押し流す巨大なエネルギーを見ていると、自然への脅威と畏怖の念を強くします。と同時に、これからの復興に対して、日本人の真理と英知をどのように発揮するのか、天地の偉大な力のもとに試されているようにも感じます。しかも四重苦とも言われる大震災がもたらした課題には、先の光明が見出されない状況下あることも事実です。長い歴史的な観点から見れば、現時点は、大きな転換点かもしれません。

そんな状況下ですが、私達の八ヶ岳森林文化の会もNPO法人として発足し、一年を経過しました。振り返ると会員、理事、関係団体の皆様の御協力により、部会、事業部、事務局のそれぞれの活動が自走力を持って活動を展開できたことが、成果に繋がったものと考えております。その意味で、関係された皆様に深く感謝しております。これからは、国際森林年として、又行政での林業再生プランによる国や県や市町村の具体的な活動が展開されるものと予測できます。私達の団体も森林保全活動を支柱にして、活動を進めてきており、大きなチャンスも考えられます。

活動を通して、次世代に残し、伝えるものが何であるかを掴んでいくと自負しながら、取り組んできている所です。しかし、大震災の小学校の津波避難で、釜石市の小中学校の全員避難と石巻市の小学校の避難で、多くの児童が亡くなられた事実を見せられると同じ世代の孫をもつ者として涙を流さざるを得ません。同じ津波避難行動をしているのに、どうしてこのような自然の厳しい結果になるのか。その点で、私達も自然に対して、もっと謙虚に向き合っていくこと、次世代に伝え、残すものが、真実で、確かなものであることの問いかけしながら進めていかなければならないと感じています。林業復興の国の方向付けとも合わせ私達の森林保全活動を通し、自然と共生できる会の発展と充実に向けて今後も継続して努力を図りたいと思います。

## よみがえさせよう地域の森林

副理事長・森林整備事業部長 河内 久

### 1. コンクリート社会から木の社会へ

平成21年12月に農林水産省が発表した「森林・林業再生プラン」目指すべき姿として10年後の木材の自給率50パーセント以上をめざすものであり我々森林整備にたずさわる者としてはおおきな喜びとして受け取ることができました。

しかし、作業現場では補助金等の体系が見直しされることもあり早期に見直しのされるのを希望する者です。

### 2. NPO法人 八ヶ岳森林文化の会「森林整備事業部」目標と課題

本年度は、茅野市「市民の森」池の西側5ha～6haのカラマツ林を森林整備の目的地に指定しています。整備を担当するメンバーは、38人ではありますが、整備作業については安全第一を心がけメンバー全員の協力により楽しい現場にして行きたいと考えていますのでよろしくお願い申し上げます。

### 3. 長野県の施業方針を基本に「間伐・集材」作業を推進致します

昨年度の集材作業の反省から、本年度は集材能力の向上を目指して「林内作業車」をレンタルして活用して行きたいと考えます。現時点で考えられる「林内作業車」は、筑水キャニコム製（やまびこ）であります。運転技術講習等により一歩上の取り組みをして技術力の向上を目指しましょう。

### 4. 私事ではありますが「ボランティア活動の指針」を紹介致します

つぎに掲げる五つの点にたちかえり自己の「ボランティア活動」を点検して自らの「生きがい」「充実感」「心の安らぎ」等を考えてみるのも良いと思います。

- ① 自己犠牲から自己の成長へ
- ② 一方向から双方向の関係に
- ③ 肩書き人間から対等な市民関係へ
- ④ 特別な活動から日常活動の一部へ
- ⑤ 画一化された社会から多様な価値観を認める社会へ

## 雑感

副理事長・事務局長 矢崎恵子

NPOになって何が変わったの？お解りですか？一言でいってしまえば、ちょっと大人になった感じでしょうか。

八ヶ岳森林文化の会発足準備会のときからずっと茅野市役所生活環境課の皆さんに手取り足とりお世話になっていて、それはNPO法人になるまでずっと続いていたのです。（勿論今でも充分お世話になっていますが・・・） 会計や広報から「コピー1枚お願い！」まで、1任意団体が公人を独占（？）している図式はちょっと不思議ですよね。

NPOになり事務局が独立した効果は、広報の充実による会の周知・各事業への一般参加者増加。会計自主管理による会会計・運営の明確化等々。この1年、縁の下では事務局スタッフが必死（！）になって、車輪をこぎ続けていたのです。で、当会の社会的認知度は格段に上がったと思いませんか（??）。

そして、NPOになったからといって、運営を一部会員が独占するものではなく、みな協働することに意義があり、その方が断然面白いことを知る人が増えたこと。これは私の幻想？ではないと思いますが、いかがでしょう。

23年度も登山や森林整備から事務所の障子貼り（よろしく！）まで共に働き、多くの人々に多様な「森林」のことを優しく（易しく）・楽しく伝えていけたらいいなと思います。

## 持続可能な社会を

副理事長・森づくり部会長 定成 寛司

4月29日に吉田山で『市民の森』開きの催しがありました。またその一ヵ月前には、埴原田の伊藤窯で間伐材のコナラ（炭材）、カラマツ（燃材）を活用した炭焼きがありました。

森開きでは、米沢小学校の児童生徒と、その父母とドングリとクルミの種まきをしました。そ

の後、野鳥の楽園ゾーンで、巣箱を組み立て、できあがった巣箱を架けました。帰り道では、落ち葉を集めて堆肥づくりポットに入れました。堆肥ができたら、ドングリやクルミの種まきをした苗床に蒔く計画です。

子ども達と野鳥の楽園ゾーンに向う春の日差しの中で、「人は森を利用し、それによって森も護られている」と、考えながら歩きました。

むかしから、人々が利用してきたにもかかわらず破壊されなかった里山の自然は、むしろ利用することによって維持されてきました。吉田山も、人々がむかしから日常的に利用してきた里山です。薪や柴を採り、炭焼きをして燃料としてきました。また、落ち葉を集めて田にすき込んで肥料としました。山の恵みとして春には山菜を、秋には木の実やキノコなどの食料を採ってきました。

子ども達の元気な声を聞いていると、私達の命が循環することこそが、循環型社会の本質だとも考えました。また、現代文明がひきおこしてきたさまざまな環境問題も、人の営みも自然の一部であると考えて行動しなければ、持続可能な社会の実現には結びつかないのではとも考えた一日でした。

## 森林文化と原子力発電

森林観察学習部会長 南波一郎

5回にわたり信大の中堀先生に森林文化に関してご講義頂いた。地球の長い歴史の中でごく最近現れた人類が如何に道を誤りつつあるかが理解された。循環しない地下資源（化石燃料）エネルギーから自然エネルギーへの転換が急がれる中、当NPOも身近な課題として間伐材利用のペレット普及への提言を行ってきた。しかし一向に具体的動きにならない苛立ちを感じている。

そんな折、東北・関東大地震が発生、安全と言われた原子力発電所が制御不能、危機的状況となった。原子力発電は循環しないウランを利用するものであり、使用済燃料は数万年に亘って放射線を出し続けるがその処理方法さえ確立していない。温暖化対策上、優れているとの観点から世界的に推進方向で見直されているが、有害な物質を半永久的に残す事になり化石燃料以上に危険であり憂慮する。

今必要な事は持続可能な循環型エネルギーで生活方式を再設計、再構築する事であり、それには過去の森林文化から学ぶべき事が多々あると思う。多大な電力を消費するリニア新幹線等は正にあるべき姿に反する代物なのに何故押し進めるのか。我々一人一人が改めて基本から再考する必要性を震災と森林文化学習会は教えてくれた。

## カラマツのこと

森林観察学習部副部長 井村 淳一

5月に入りカラマツが芽吹きはじめた。カラマツは長枝の先から芽吹く葉の並びと短枝から芽吹く葉の並びが異なる。長枝の先から芽吹く葉は螺旋状に芽吹き葉身も少し長い短枝から芽吹く葉は円形に並び育つ。この短枝から芽吹いた葉の様子が唐文様に見える或いは唐絵のマツ(中国の絵画)に似ているところから唐松（カラマツ）と言う名が付いたと言う。唐松と言うのだから原

産は中国と思いついていたが日本原産とのことである。分類体系では、植物界裸子植物門マツ亜門マツ綱マツ目マツ科カラマツ属の一種で、このカラマツ属は10種以上がヨーロッパ シベリア ヒマラヤ、北アメリカ北部に分布している。樺太や千島列島、東シベリアに分布するグイマツがカラマツに一番近い種で8000年前には日本にも分布していたそうである。

カラマツ(落葉松)を謳う歌は色々ある。春の芽吹を謳う歌では「北国の春」で長い冬が明け明るい陽射にまた躍動が始まる希望をカラマツの芽吹きに被せていて私はこの歌が好きである。しかし何故かカラマツを謳う歌は哀愁が漂う歌が多い。島倉千代子の「哀愁のカラマツ林」が代表格かもしれないが、やはり「からまつを過ぎ、からまつをしみじみと見き。からまつはさびしかりけり、からまつはさびしかりけり。」北原白秋の「落葉松」の詩全8章の第1章である。信州の星野温泉で婦人と共に落葉松の林を散策した中で作られた詩ですが、カラマツはさびしいという心境を理解するのは難しい。春の芽吹きの緑の明るさ、夏の強烈な光に負けない濃緑の強さ、そして晩秋の山を暖かくラクダ色に包むカラマツをさびしいと思えるだろうか？ この黄葉の輝きの後に訪れる落葉を自分の人生に照らしての共感を謳ったようである。

愛唱歌「からまつを秋の雨に 私の手が濡れる、からまつを夜の雨に わたしの心が濡れる。からまつを陽のある雨に 私の思いでが濡れる カラマツの小鳥の雨に私の乾いた眼が濡れる。」状景は違うが、北海道の十勝平野の小雨のけむる晩秋に日勝峠から眺めた広い畑を防風林、防雪林として直線に囲むカラマツの落葉前のラクダ色と黒い畑の色とのコントラストは何とも言えない自然の暖かい贈り物と思えた記憶が残っている。

天然カラマツの大王を思わせる貫禄と人工林に育つカラマツの貧弱な姿に思うことや、カラマツの落葉の始末の悪さや暖かさに思うこと、カラマツの間伐材に思うこと、カラマツの素性の良さや悪さの評価に思うこと等、カラマツに思うことは多い。

## 初めての作業路開設

森林整備事業部副部長 久保田 勉

22年度は搬出間伐に欠かせない作業路の開設に初めて取り組みました。搬出間伐した面積(1.62ha)の大半は谷に落ち込む急傾斜面、材を搬出するには谷の底地と道路を結ぶ作業路がどうしても必要でした。

開設工事は勿論人力では無理、土木の専門の笹岡さんに無理を言ってお願いしました。少ない予算にもかかわらずボランティアで引き受けて頂きました。

盆明けから猛暑の中、工事が始まりました。しかし工事は予想外に大変でした。地山勾配が急のため掘削量が多かったことに加え大径木の抜根です。重機による堀越しとチェーンソーによる根切りなど悪戦苦闘でした。

工事日数は予定を超えましたが無事完成し伐木のほとんどを搬出することができました。笹岡さんには心から感謝申し上げたい。

今後も作業路の開設が予測されますが費用に対し補助金が少なく材の搬出を促進しようとするなら行政の一考が欲しいものである。

## 山里暮らしの醍醐味

森づくり副部長 藤森俊希

茅野に引っ越してきて丸5年。40年を超す東京生活では思いもつかない日々を過ごしています。

八ヶ岳森林文化の会（以下略称・八森）と出会ったのは、茅野市の広報誌がきっかけでした。「薪をつくる」ので参加しませんかというお知らせ。願ってもないことでした。

茅野に家建てた際、設計者から勧められて薪ストーブを使い始めました。当初は、近くの製材所からナラやサクラなど広葉樹の薪を買っていました。

永住を始めたからには、自分で薪をつくってみたい。庭づくりで世話になった園芸業者から、伐採したカラマツがあるが薪にしないかと声をかけられました。薪材をつくるにはチェーンソーが必要です。東京ではハンとボールペンより重いものを持たないような生活でした。店頭には、高価なチェーンソーがずらりと並んでいました。定年退職した老体で果たして使いこなせるのだろうか？不安いっぱい打ち消すように軽量・高性能が売りのスチール社 MS200 を購入しました。大奮発でした。見よう見まねで玉切り、真っ直ぐな切り口を見た園芸業者、「上手だね、おらが切ると曲がっちゃうだよ、誉められて悪い気はしませんが、なぜ誉められたか訳がわかりません。後々、腕のせいではなく、切れ味鋭い新品のソーチェーンのお陰だということが分かりましたけど…。

八森の行事でたくさんの失敗を重ねて早5年。八森の行事に半分出ているかどうかですが伐採した木は200本を超すでしょう。ソーチェーンは4本目。昨年の小宮祭神社境内清掃では、区の人たちに交じってチェーンソーが活躍しました。いっばしの使い手のつもりは毛頭ありませんが、区内の人から持ち山の間伐を頼まれることもあります。細いカラマツが密生しているのを見ると、すぐにでも間伐作業に取り掛かりたいような気がします。

八森会員の先輩や区内の人からいただいた玉切った薪材は、ゆうに2年分はあります。わが敷地内は手狭で区の人々の林を借りて置場にするとところまでできました。

薪づくり → 八森行事 → 森林活性化

山里暮らしの必要から森林活性化の意味することに気付いたような気がします。

先日の市民の森間伐作業では、枯れたカラマツの重心が明らかに東側にかかっていたので受口をつくり、西側から追い口を入れてしばらくしたらチェーンソーが抜けなくなりました。助けに来てくれた大先輩に、重心を測って受口をつくったと説明したら、「枝ぶりですね。枯れ木でも上の方にある枝の重みはすごいですよ、見上げると、西側に枝の重なりが張り出していました。

失敗するたびに、自然の営みの奥深さを知らされます。観光、鑑賞の対象だった森林が、肌ふれあう身近な生き物として感じられるようになりました。山里暮らしの醍醐味に一步近づいたのでしょうか。

## 春の妖精

森林観察学習部会 渡辺 和代

やっと運動公園の桜が満開を迎えようとしています。今年は春の出足が遅いようです。

4月16日に市民の森で野鳥観察会が行われました。会の終了後、会員の方の自宅の庭にアズ

マイチゲ（東一華）が咲いているというので、見せて頂きました。林の下に白い可憐な花達があちらこちらに寄り添って咲いていました。去年、多田先生の講演の時に話して下さった春の妖精とはこのことだと思いました。先生の著書の「自然の愉しみ方 春」によると木々が芽吹く前に大急ぎで、葉を広げ、花を咲かせ実を結ぶ春の短命な花々をスプリング・エフェメラル 春の妖精と呼ぶとのこと。カタクリ、セツブンソウ、キクザキイチゲ、アズマイチゲなど。運動公園にも白い花が咲いているというので見てきました。アズマイチゲでした。マレットゴルフのホールの近くなので、踏まれなかと心配になりましたが、風に揺れて楚々と頭をたれていました。別の場所のアズマイチゲの直ぐ傍ではもうニリンソウが蕾をつけていました。

今年の春は悲しみと一緒にやってきました。来年は心から春が来たことを喜べますように、また日々に暮らしに平安がもたらされますように祈っています。

また、今年から会計を手伝うことになりました。わからないことが多々ありますのでご迷惑をおかけするかと思いますが、よろしくお願いします。

## 馬と少年

森林観察学習部会 野澤仁三郎

昭和の30年代、農家であった少年の家には、栗毛色の雌馬がいつも飼われていた。馬は農家にとって運搬や、耕起、また厩肥生産など、無くてはならない重要な労働力であり、また、大切な家族の一員でもあった。

馬は、飼い主には従順であったが、自分主義、主張は明確に態度で示す感情をもった生物でもあった。したがって、厩も母屋の中うまやにあり共に生活しているという感が強かった。少年は馬の世話を手伝ったが、朝寝坊などしていると、馬が厩の板壁を「ドン、ドン」と足でけとばして餌を要求するので、うるさいやつだ、と思いながら起きて行かざるをえなかった。両親は息子が朝寝坊しないようにと、馬の世話をさせたのかも知れない。餌は稲わらと牧草をきざみ、米糠を混ぜ米の研汁とぎを掛けてやるが多かった。繁忙期で労働が激しい時は、ヒエや、ジャガイモを大釜で煮て与えることもあった。

冬場は仕事も無くのんびりしていた馬も、春、田畑の作業が始まると急に忙しくなる。水田の耕起から始まり厩肥や山からの草肥、蒔敷の運搬、それに続いて水を入れた田圃しるの代かきと、息をつく暇も無い。代かきは代車しろくるまというのを馬が引いて回るので、それにはよく乗って手伝いをしたが、馬は疲れて来ると立ち止ってばかりで動かなくなってしまう仕事は遅々として進まない。こちらも子供だから嫌になってつい居眠をしてしまうこともある。居眠をしていると馬が急に動きだして、そのはずみで泥田の中に落ちてしまったこともあった。

それでも一枚の田圃が終りに近づくと、馬もどンドン動く。これが終れば家に帰れると思うからだ。終ってこれで帰れると少年も思っていると、土手草を刈っていた父親が「まだ、陽が高いで、もう一枚上の田をやれや」と言う。二枚目の田に入れると、馬はガックリと首をたれて、もう動かない。時には田圃から勝手に跳び出して家に帰ってしまうこともあった。

田植が終わると、今度は山へ、ハギ刈りに行く。「ハギ刈り」とは牧草刈りのことで、馬や牛は、春から秋までは田圃の土手草などの生草を食して過すが、晩秋から春までは乾燥させた稲ワラや、牧草を餌とするので、それを備蓄しなければならないからだ。馬一頭あたりの採草地面積は約二

ヘクタールにも及ぶのである。ほとんどの農家に馬や牛が飼育されていたのだから、その面積は、膨大なものであったと思われる。霧ヶ峰高原や車山などが、今のように樹林化せず草原で維持されたのもそのためである。

少年の住む集落では蓼科高原の現在、東洋観光や東急リゾートの周辺一帯が、採草地で、朝、母が作った弁当を馬の鞍にくくり付けて、六―七キロはある山道を馬と前後しながら歩いた。山へは祖父と行くことが多かったが、馬に乗せてもらえることは、あまり無かった。馬を大切にしていたのか、孫の足を鍛えるためだったのか、今となってはわからない。手伝いをしに行くというより、山へ行って遊べるのが楽しみだった。山は春から夏には、ワラビ、山ウド、コレイ（ギボシ）、アケビなどが採れたし、秋には、山ブドウ、地ナシ（草ボケ）、チョウセンゴミシ、ハシバミなどが採れた。また小川には、山女や、岩魚も居た。これらを採ったり追いかけていると、山の一日は短かった。昼飯も特に楽しみな時間で、メンパ（昔の弁当箱）に入った白い御飯に小川の水を掛けて、味噌漬をのせて食べる。味噌が御飯にしみて、何とも言えないおいしさであった。小川の水もその頃はきれいでいくらでも飲めた。馬は鞍をはずされ、皆が帰るまでのんびりと草を食べ続けている。乗って見ようと、たて髪につかまり這い上がるが、鞍が付いていないので滑って、すぐ落されてしまう。子供だと思って馬鹿にされていたのかも知れない。

ハギ刈りが終ると、薪切りをする。薪はイロリや、カマドの燃料で、無くてはならない重用品である。薪にする木は、そんなに太い物ではなくベイタと言って、鉋で切り落とせる太さであった。

晩秋、最後にするのが、炭焼である。炭はバラ炭といって、堀コタツに入れる暖房用で、材料は低木のマユミやレンゲツツジ、ニシキギといった細いものを鎌で刈り取る。太い物を使わないのは、焼く時間が長くなり、その日に持ち帰れなくなるからである。地面に窪地を作り、その上で火を付け炭になって下に落ちた物をかき出して、かくはんして消火する。消火に水を掛けないのは、濡らすとなかなか乾かないのと、持ち帰る時に重くなるからである。作った炭は麻袋に入れ馬が背負う。左右三袋ずつ六袋、いわゆる、一駄である。苜蓿や草の束も六束で一駄である。かくはんして、消火しただけなので、帰る途中でたまに火が出ることもあった。背中で火が出るので馬はおおいに慌てるが、人は馴れたもので、少しも騒がずその辺にある棒きれで火の出た所をつついてやると消えるのだ。持ち帰ったら庭の真中か畑に放置する。物置などに入れると火が出て火事になる恐れがあるからだ。

昭和の三十年代の中頃から農家の生活も急激に変化する。燃料や暖房はガスや石油になり、田や畑には、化学肥料が投入され、農事は耕運機や自動車が導入され、薪や炭、そして馬や牛も用無しになった。我家の栗毛色の雌馬も、所在なげで寂しげであった。

ペットにして、いつまでも飼い続けるわけにもいかず、祖父と父は手離すしかないと話していた。

少年は高校生になっていた。或日、学校からの帰り道、馬の売買をする博労ぼくろうに引かれて歩いて来る我家の馬に出会った。少年と行違う時馬は、チラッ、と少年の方を見たが、すぐに前に目を戻して静かに通り過ぎて行った。それは最後の別れを告げる悲しい目だった。

走って家に帰って見ると、主あるじの居なくなったガランとして厩があるだけだった。自然に涙が流れた。少年は知っていた。馬の行く先が屠殺場であることを。

少年は成人して、サラリーマンになった。労働組合で委員長をしていた時、よく会社側の常務

と団体交渉などで、ひざ詰談判をした。特に、賃上げ交渉などは、し烈だった。この常務さんは戦争中、騎兵隊で馬と共に戦ったとのことで、或日、昼食を共にした時、

「委員長、私は、食べるものは何でも食べれるんだけど、ただ馬の肉だけは食べれないんだよね。可愛そうでね。」

と言った。委員長は黙ってうなずき、あの最後の馬との別れの日を思い出していた。

## 四方山話

森づくり部会 井上 英利

家を建ててから3年が経過しました。家の周りには色々な植物が生えてきています。

(妻に言わせると全部”草”になってしまいますが...)

もともと4年位前に山林だった所を造成した土地なのですが、年々、生える植物の種類が増えていきます。(名前が答えられない自分が悲しいですが...) 造成された土の中で眠っていたのだろうか? それとも周りから飛んできたり、鳥が運んできたのだろうか?とか考えたりしています。どちらにしてもその生命力には感嘆しますね。

一番厄介なのが蜂ですね。ちょっと高台に家が建っているので、家の下に石積みがあるのですが、その石の影の部分に蜂がよく巣を作ります。かわいそうだけど、気が付いたら、蜂用の7mとか飛ぶ殺虫剤で駆除してます。今年は、試しに、炭焼きでいただいた木窄液を薄めて、撒いてみようかと思っています。虫除けにもなると聞いていますので、期待しています。

この木窄液、今までまったく使っていませんでしたが、今年は、薪置きを作り始めましたので、その材(SPF材)にも試しに塗って見ました。白無垢の材に塗ったばかりは、あんまり変わらない?と思いましたが、乾燥したら、灰色っぽくなって、いい雰囲気の色合いになりました。劣化防止の効果も期待して塗っていますが、効果がわかる頃には忘れそうですね。(ははは。)

木窄液、皆さんはどのように活用されてますでしょうか?



## 編集後記

NPOとして活動を始めてから1年が経ちました。事務局としてはかなり大きな変更で、新たに局員に加わっていただいたり、以前より苦勞していただいたりと、まだまだ、大変な状況の中にいます。会員の方で、こんなことなら手伝えるよ! という方が居りましたら、ぜひ、事務局長(矢崎恵子さん)や事務局員に声を掛けていただけるとありがたいです。

(さしあたっての野望は、週一で良いので、事務所に常駐者を置きたいといったところです。)

最後に、会報発行にあたりご協力いただきました会員の方々ならびに事務局、理事の方々に深くお礼を申し上げますとともに、今後も皆様の御協力をよろしくお願いいたします

---

編集委員会(事務局内)

編集委員長

編集委員

HPアドレス

井上 英利

井村 悦子

伊藤 功

加藤 修

<http://www.8moribunka.org/>